

トレイラー 予告編は短く——序文に代えて

本書は、「イデオロギー」という題目のもと、カルチュラル・スタディーズ、ジェンダー論、クイア理論、ポスト・コロニアリズムといった切り口でアメリカ映画を論じるアンソロジーである。

まず、イデオロギーとは何か。タイトルがズバリのテリー・イーグルトンの著書『イデオロギーとは何か』を繙いてみると、とてもここでは要約できない錯綜した意味に面食らってしまう。では、手っ取り早くウイキペディアに当たってみると、「物事に対する包括的な観念」、「日常生活における、哲学的根拠」、「社会に支配的な集団によって提示される観念」、とお手軽さが売りのネット百科事典でもスカッと定義されていない。

しかし、この意味の増殖にこそ、イデオロギーの本質が隠れているのではないだろうか。つまり、簡単かつ暴力的に（それこそ、イデオロギー的に？）定義してしまえば、「イデオロギー」とは錯綜した社会・歴史的文脈によって決定され、それぞれ異なる意味作用を発生させるポジションのことである、と。

したがって、立ち位置の数だけイデオロギーは存在し、「社会に支配的な集団」が普遍性の名の

もとに押し付けてくる観念だけがイデオロギーではないことになる。支配的イデオロギーの暴力に晒される周縁的なグループの皮膚感覚あふれる生活意識（あるいは無意識）も、ある視座からの観念の産物、イデオロギーと言えるのだ（この特定の観念が「土着性」や「民族性」のように本質主義化されることによって、周縁的な集団のなかにさらに周縁化されるサブグループが再生産されることになる）。このように考えると、体制／反体制、白人／有色人種、男性／女性、といった単純な図式ではイデオロギーを捉えることはできない。そこにあるのは単一方向の主従関係ではなく、各イデオロギーのヘゲモニーをめぐる闘争と交渉であり、そうした重層的な運動によって中心と周縁の関係性が複雑に変換・交錯し合うダイナミズムなのだ。

アメリカ映画もそのようなダイナミズムが展開されてきた場であったし、今でもそうである。『イージー・ライダー』(Easy Rider, 1969)をはじめとするニューシネマの反体制的な身振りに孕まれるホモソーシャルな男性中心主義、『羊たちの沈黙』(The Silence of the Lambs, 1991)のフェミニズム的な身振りに潜む抜き差し難いホモフォビア、そして『ミルク』(Milk, 2008)のLGBT的な身振りに紛れて再導入される古典的な抑圧を産み出していく解放と回収の弁証法にほかならない。さらにそれへの対抗がまた新たな抑圧を産み出していく解放と回収の弁証法にほかならない。

この意味で、ハリウッド映画とは、わかりやすく安定した構図の背後で諸々の力がせめぎ合う陣取り合戦の競技場^{アリーナ}であると言える。そして、こうした映像の力学をクイアの視座からなぞっているのが、トッド・ヘインズの『ポイズン』(Poison, 1991)と『エデンより彼方に』(Far from Heaven,

2002) である。

ニュー・クイア・シネマ系の『ポイズン』は、「ヒーロー」(“Hero”)、[「ホラー」(“Horror”)、[「ホモ」(“Homo”)とHの韻を踏む三つ物語で構成される。「ヒーロー」は郊外の平凡な家庭で起こった七歳の男の子による父親殺しを、ローカル・ニュースのザラついた画像で綴る。犯人の少年は姿を見せず、動機もまったく解明されないが、「ホラー」、「ホモ」という一見して関連のない物語とパラレルに展開することで、その意味が炙り出される仕掛けになっている。

「ホラー」は五〇年代のB級SFの手法を用いた(加えて、『マタンゴ』の影響大)エイズ問題のアレゴリー、「ホモ」はその名のとおりジャン・ジュネの『薔薇の奇蹟』が元ネタのゲイ囚人ものである。つまり、「ヒーロー」をこれら同性愛の挿話と接続することで、郊外住宅地という異性愛の砦を内側から食い破り、形骸化させていく不気味な諸力の存在がクイアに浮かび上がってくるのである。それはちょうど、『ブルーベルベット』(Blue Velvet, 1986)の郊外住宅地と同じである。充足した中流家庭の象徴である芝生の表層をひと皮剥いでみれば、そこには昆虫がお互いを食い潰していく弱肉強食の世界が露呈されるのだ。

安定した表層に潜在する諸力間の闘争。このすぐれてイデオロギー的なテーマを、ヘインズはメジャーでさらに追及する。『エデンより彼方に』は、ダグラス・サークの『天はすべて許し給う』(All That Heaven Allows, 1955)を鮮やかにパステイシユした「メロドラマ」である。当然、メロドラマの前提として異性愛があり、そしてその延長線上には家庭があるが、ヘインズはその前提を徹

底して突き崩す。

舞台は再び五〇年代の郊外住宅地、アメリカの豊かさや安定を象徴する時代と場所。しかし、それはまた赤狩りの時代でもあったように、暴力と抑圧のうえに成立した安定と豊かさでもあった。その抑圧の構造は、黒人の庭師と同性愛者の夫という二人の他者を媒介として可視化される。こうして郊外住宅地という「エデン (Heaven)」は、その表層の安定を維持すべく、外部 (エスニシティ) のみならず内部 (セクシュアリティ) にも巢食う拮抗する諸力をかろうじて制しているパワーゲームの場であることが剥き出しにされる。

そして、この論集に通底するのも、こうした力学への考察である。以下、簡単な各章の紹介 (以下、煩雑になるので、各論で扱われる映画の原題と公開年は省略)。

三添篤郎は五〇年代の短編映画『ダック・アンド・カヴァー』に着目し、今ではナンセンスに見えるその啓蒙映画を起点として、冷戦下アメリカの「核」と「学」との抜き差しならぬ関係を明らかにする。つまり、この一〇分足らずの短編には、核開発といったハード面のみならず、核時代における知の育成というソフト面も推進してきた冷戦下のポリティクスが集約されているのだ。アトミックパワーに勝るとも劣らない「マンパワー」育成計画は能力主義イリトクラシーを偏重しており、そこにはIQテストの開発や、私たちにお馴染みのTOEFL、TOEICといった資格試験の起源もあった。さらに筆者は、これまで冷戦や核開発とは無縁と思われてきた小説、サリンジャーの『ライ麦

畑でつかまえて』をこの文化的な文脈に接続させ、ホールデン少年のアウトロー的な言説が如何に「核」／「学」とシンクロしていたのか、その時代性を詳らかにする。

越智博美は、冷戦期から現在に至るまでの地政学的な変容が、007シリーズにどのように反映されていったかを辿っていく。『ロシアより愛をこめて』の（とりわけ、ダニエラ・ピアンキの）印象が強いせいなのか、このスパイ映画からは冷戦時代の米ソ対立がつい連想されがちである。しかし、筆者によれば、シリーズのイデオロギー的機能は冷戦体制の解消ではなく維持にこそあり、そのため仮想敵がソ連ではなく、米ソ関係を攪乱する第三項とされている点を指摘する（たしかに、ピアンキを操るのはソ連ではなくスペクターだ。このように考えれば、オリエンタリズム映画の極東ならぬ極北『二度死ぬ』で米ソ間を仲介する日本の役割も合点がいく。しかし、冷戦終結後、スペクターはその身体性を喪失していき、それはそのまま実体のないグローバル経済の隠喩となっていく。ポンドが対峙するのはペルシャ猫をなでる禿頭とくとうの悪の権化ではもはやなく、文字通り見えない権力としての亡霊スペクターなのだ。

村上東は、ロバート・オルトマンの『バード★シット』を対抗文化への批判的テクストとして読み解いていく。七〇年代初頭、ハリウッド史における飛び地のような作家主義の時代、『M★A★S★H マッシュユ』や『ナツシユビル』の監督が撮った作品、と言えば誰でも反体制的なニューシネマを連想するに違いない。しかし、筆者はそこに対抗文化の挫折が先取りされた形で表象されていることを指摘する。イカロス神話に基づいたブルースターの「飛ぶ」行為は、地上の束縛か

ら「跳ぶ」こと、社会改革のメタファーにほかならない。しかし、それはアストロドームというシエルター内での飛翔であり、そこから敷衍して核シエルターで防備された超大国の庇護のもとでの反抗であることが示唆される。対抗文化がロックやファッションなどの商品として、いとも簡単に市場に回収されていったことも同じ論理による。最後に筆者は現在に至る対抗文化の蹉跌を総括し、その「跳ぶ」行為があらかじめ失われたものであったことを歴史的に概観していく。

大田信良は、フランク・キャプラの『或る夜の出来事』を新旧グローバルパワーの交渉という地政学的文脈に接続させて読む。ロマンスと言えば性の政治学がお約束だが、ここでは逆説的にも——いや、正統的にもと言うべきか——筆者はこの映画に政治学そのものを見出していく。具体的には、哲学者スタンリー・カヴェルのハリウッド映画論を参照枠としつつ、イギリスの劇作家ノエル・カワード原作の映画『私生活』を媒介として、このスクリーンボール・コメデイの古典を米国リベラリズムに基づく新しい社会共同体の寓意として読み解いていく。三〇年代、世界大恐慌の洗礼を受けたにもかかわらず、その発信源となることでアメリカは超大国としての自らの地位をはずらさずも立証し、それに呼応するかのようにハリウッドは黄金期を迎える。新勢力アメリカと旧勢力イギリスの政治・文化・市場をめぐる対立と矛盾、そして交渉が、同時期に制作されたロマンスのプロットを重層決定していくプロセスが丁寧に通られていく。

宇津まり子は『ハッシュピーパーバスタブ島の少女』を取り上げるが、映画というテキスト自体ではなく、それに対する受容の分析、いわば映像における「読者反応論」を試みている。筆者に

よれば、この映画をめぐる批評言説は二つに大別される。そのひとつとして、マジック・リアリズムの手法を用いたその寓話的な構成から、環境破壊に警鐘を鳴らすエコロジ―神話として解釈する言説がある。他方、その神話的な表象の装いのもと、無知と偏見に捉われた黒人低所得者層というステレオタイプを強化する、抑圧的なイデオロギー装置と糾弾する言説がある。筆者はこの両者を批判対象として、人種問題を白人／黒人というわかりやすい対立軸に還元することで、そうした批評言説自体が多様なエスニシティを抑圧する政治的な効果をもつてしまいう危険性を指摘する。以上のようにこの論では、一本の映画が錯綜した文化・社会的な文脈に投げ込まれ、災害、階級、人種をめぐる諸言説が拮抗する力場となっていく過程が明快に綴られていく。

伊達雅彦はホロコースト映画の系譜を辿りつつ、『デイファイアンス』と『縞模様のパジャマの少年』をテキストに二二世紀におけるこのジャンルの質的な変化を論じていく。『デイファイアンス』は「戦うユダヤ人」のイメージを前景化することで、「犠牲者」という従来のステレオタイプを解体していく。たしかに、『ミュンヘン』(Munich, 2005)や『イングリリアス・バスターズ』(Inglourious Basterds, 2009)にも見られるように、ユダヤ人の表象のベクトルは変わってきている。筆者が指摘するように、それはイスラエルにおけるユダヤ人の政治的・軍事的力学の変容が深く影響していると言えるだろう。その意味では、視点をドイツ人の少年に据える『縞模様のパジャマの少年』は手法的には斬新だが、テーマ的にはお約束の域を出ない。むしろ、筆者もこちらの方に強意を置いているのだが、衣服「パジャマ」でガス室送りが決定されるという残酷なナンセンスに

こそ、ホロコーストの無根拠を露呈させるこの寓話の衝撃があるように思われる。

中尾信一は『黒い罨』を中心に、映画における「境界線」の意味作用について考察する。オーソン・ウェルズ監督・出演のフィルム・ノワールの舞台は文字通り境界線、アメリカとメキシコの国境である。有名なロング・テイクのオープニング、陽気なラテン・ナンバーをBGMに、国境は異民族が自由に交通する祝祭的な空間として提示される。しかし、自動車爆破事件を契機として、それは「文明」／「野蛮」、「善」／「悪」の境界線として前景化されていくことになる。さらに、そうした国家・民族的な境界線にジェンダーの境界線が重ね合わされることで、差異はいっそう強化されていく。だが、ウェルズの面目躍如たるところは、このように映像の政治学を実践しつつ、それを異化せずにはおかないところにある。筆者が論じるように、「差異の普遍化」を体现する刑事クインランによる事件のでっち上げは、境界線を引く行為の恣意性と、その行為自体が「善」／「悪」の境界線を侵犯してしまうアイロニーを暴露するものにほかならない。

松崎博は『ウエスト・サイド物語』を「色」と「他者」という切り口で再解釈する。たしかに、このミュージカルの古典で際立つのは、音楽や踊りもさることながら、高速道路の赤い鉄骨など鈴木清順を思わせるキッチュなカラースキームである。その様式美はジェット団とシャーク団の白と黒のコントラストにおいて、文字通りイデオロギー的な色彩を帯びてくる。今では失笑を禁じ得ないナタリー・ウッドの「黒さ」は、アメリカ独自の「人種」の定義、有色人種の血が一滴でも混じれば「黒人」と定義されるワンドロップ・ルールのデフォルメにほかならない。さらに筆者は、エ

ニイボデイズという抑圧されたトランスジェンダーのキャラクターを導入することで、色の政治学をさらに敷衍させる。伝統的にミュージカルは同性愛と密接な繋がりがあるが、舞台版が制作された五〇年代、同性愛者は共産主義の走狗として赤狩りの標的であった。それゆえ、エニイボデイズのLGBT的欲望はトニーとリフのホモソーシャルな欲望へと置換され、同性愛カラーのラヴェンダーが極彩色の物語を支配する色の無意識となることが分析される。

細谷等はハリウッド映画におけるクイアの表象を歴史的に概説、その抑圧と解放の弁証法を解明していく。黄金期の三〇年代から五〇年代まで、ヘイズ・コードの規定により、ハリウッド映画では同性愛をあからさまに描くことはタブーとされてきた。しかし、映画産業の斜陽化が決定的となる六〇年代、倫理規制の緩和に伴って、セックスや暴力と並んで同性愛がスクリーンにカミングアウトする。だが、それはバッシングのためのカミングアウト、異性愛中心主義を強化するための装置としてであった。エイズ危機を迎えた八〇年代以降も事情は変わらず、『フィラデルフィア』に典型を見るように、同性愛者は病と同一視され、他者として表象され続ける。九〇年代に入るとニユー・クイア・シネマが台頭、その影響から『ブロークバック・マウンテン』のような同性愛映画がメジャーでも制作されるようになる。しかし、その解放の身振りの背後で、クイアの脱クイア化という巧妙な回収の手續きが行われていることを筆者は明らかにしていく。

照沼かほるは、『ユー・ガット・メール』などのロマンティック・コメディで知られるノラ・エフロン の諸作品を取り上げ、そこでポストフェミニズム時代の女性たちがどのように表象されて

いるかを辿っていく。エフロンの描く女性たちは、恋愛や結婚を自己選択・自己実現の対象とする個人主義者である。恋愛・結婚をイデオロギー的な実践として批判してきたフェミニズムの面影は、もはやそこにはない。しかし、ロマンスとキャリア形成を両立させるヒロインたちの姿は、あくまで理想的なロールモデル、映画的な願望充足にすぎない。実際、筆者が指摘するように、エフロンの作品はつねにアンビヴァレントである。そこにはフェミニズム以降の解放が、自己責任のネオリベラリズムへと容易に転化してしまふ危険性を想起させる瞬間がある。その意味で、エフロンの脱政治的なロマンスは、ポストフェミニズムが直面しているアポリアを提起する、すぐれて政治的なテクストになっていると言えよう。

塚田幸光は、「プール」の表象とリンクさせつつ、ハリウッド映画における男性ジェンダーの変遷を辿っていく。ハリウッド黄金期の三〇年代、プールは恐慌時代におけるアメリカ的理想のアイコンとして機能、それは『ターザン』映画にも反映され、ジャングルの河はプールの隠喩となり、安全と快適さへの欲望の表象と化していく。それに呼応してターザンの身体も、文化的かつ多分に優生学的な「健全性」のシンボルとして眼差される。しかし、ヴェトナム戦争以降、ニューシネマの時代に入ると、男性は性／政治的なヘゲモニーを喪失し、その身体はローラ・マルヴィ言うところの視線の政治学の生贄となる。その結果、異色のニューシネマ『泳ぐひと』で晒されるのはワイズミューラーの安定した身体ではなく、バート・ランカスターの老いて震える巨体、不安と不能に苛まれるアメリカの身体にほかならない。こうしてプールは、その朽ちた男性の身体をくつきりと浮か

び上がらせる映像内のスクリーンとなつていく。

細かい経緯は忘れたが、本書の出発点は深作欣二の『解散式』にあつたと記憶している。鶴田浩二と丹波哲郎が扮する古風なヤクザが、コンビナートを背景にドスを交えるシーンが鮮烈な初期深作映画の傑作だ。編者の一人である村上氏にこの映画の話をしたとき、「映画、好きなの？　うちの大学にも中尾という映画に詳しいヤツがいるから、一度会つてみる？」となり、それでは三人で何かを残しましょう、となつて本書が日の目を見たわけである。

映画や本が二〇世紀の遺物となりつつある現在、映画についての本を出すことなど、それこそコンビナートを背景にドスを交えるのと同じくらいアナクロなことになるかもしれない。それでも、私二人の前近代的なヤクザに名状しがたい意気を感じたように、本書に何かを感じてくれる読者がいると信じて、さあいざ活字のドスを抜き……という次第であります。

最後になりましたが、この持ち込み企画を快諾、出版まで適切にファシリテートしていただいた論創社の松永裕衣子さんにはお世話になりました。改めて深く感謝いたします。

二〇一六年夏

細谷 等

核と学の遭遇——『ダック・アンド・カヴァー』、コナント、サリンジャー

三 添 篤 郎

はじめに

一九五一年、合衆国政府民間防衛局（F C D A）は、九分一五秒の短編映画『ダック・アンド・カヴァー』（*Duck and Cover*）を大々的に公開した。映画の公開は時宜を得たものであった。それは、ソビエト連邦が初の核実験に成功した二年後、核機密を合衆国外に流出させたとしてローゼンバーグ夫妻が逮捕された翌年のことであった。核攻撃によって本土爆撃される可能性は、まさに現実のものとなるうとしていた。その状況下で本映画は、ソ連から核弾頭が合衆国本土に飛んできた際、即座に机の下や扉などに「逃げて（duck）」、「頭を覆っていれば（cover）」、爆風からも放射能から

も自衛できることを、高らかに強調した。ポスト冷戦時代のわれわれの目から見ると、あまりに滑稽で杜撰な論理に立脚した啓蒙映画であった。

しかし物語の滑稽さは、『ダック・アンド・カヴァー』の文化的価値が低いことを全く意味しない。事実は逆である。『六〇年代アメリカ』で有名な社会学者トッド・ギトリンは、学生時代にこの映像に則した避難訓練を何度もさせられたことを鮮やかに記憶している (Gitlin 22-23)。さらにスタンリー・キューブリック監督『博士の異常な愛情』(Dr. Strangelove or: How I Learned to Stop Worrying and Love the Bomb, 1964) のブラック・ユーモアを彷彿とさせる核ドキュメンタリー映画『アトミック・カフェ』(The Atomic Cafe, 1982) や、TVアニメ『サウス・パーク』(South Park) のエピソード『火山』(“Volcano”, 1997) としてステイヴン・スピルバーグ監督の最新作『ブリッジ・オブ・スパイ』(Bridge of Spies, 2015) にいたるまで、『ダック・アンド・カヴァー』はアトミック・エイジの残像のように、これらの映像の要所で登場してきた。二〇〇四年、アメリカ議会図書館は、「一九五〇年代に何百万人という生徒たちに観賞された」このプロパガンダ映画を、「文化的・歴史的・美学的」重要性の高い映像に認定し、映像を半永久的に保護する「アメリカ国立フィルム登録簿」(The National Film Registry) に、『ベン・ハー』(Ben-Hur, 1959) などとともに選定した (“Saving the Silver Screen.”)。文化批評家トレイシー・C・デイヴィスも述べるように、映像の破天荒さとは裏腹に、『ダック・アンド・カヴァー』は戦後合衆国の「集団的記憶」となってきた (Davis 9)。

滑稽極まりない本短編映画が、国家的価値を持ちえてしまう事実を、素直に受け止めることは難

照沼かほる（てるぬま・かおる）

福島大学教授。主な著書・論文として、『ターミナル・ビギニング—アメリカの物語と言葉の力』（論創社、2014年、共著）、「主人公になったティンカー・ペルー『小さな妖精』の挑戦と限界」（『行政社会論集』、2015年）、ほか。

中尾信一（なかお・しんいち）

秋田大学准教授。著書として、『アメリカ文学とテクノロジー』（筑波大学アメリカ文学会、2002年、共著）。

細谷 等（ほそや・ひとし）

明星大学教授。主な著書として、『国家・イデオロギー・レトリック—アメリカ文学再読』（南雲堂フェニックス、2009年、共著）、『〈都市〉のアメリカ文化学』（ミネルヴァ書房、2011年、共著）、『アメリカ文化55のキーワード』（ミネルヴァ書房、2013年、共著）、『ターミナル・ビギニング—アメリカの物語と言葉の力』（論創社、2014年、共著）、ほか。

松崎 博（まつざき・ひろし）

愛知学院大学教授。主な著書として、『多文化主義で読む英米文学』（ミネルヴァ書房、1999年、共著）、『国家・イデオロギー・レトリック—アメリカ文学再読』（南雲堂フェニックス、2009年、共編著）、『北米の小さな博物館2』（彩流社、2009年、共著）、『ターミナル・ビギニング—アメリカの物語と言葉の力』（論創社、2014年、共著）。

三添篤郎（みそえ・あつろう）

流通経済大学准教授。主な著作・論文として、『冷戦とアメリカ—覇権国家の文化装置』（臨川書店、2014年、共著）、『アメリカン・ロードの物語学』（金星堂、2015年、共著）、「アカデミック・ライティング論序説」（『流通経済大学論集』、2016年）。

村上 東（むらかみ・あきら）

秋田大学教授。主な著書として、『高校生のための地球環境問題入門』（アルテ、2012年、共著）、『冷戦とアメリカ—覇権国家の文化装置』（臨川書店、2014年、共著）、ほか。

† 執筆者紹介

宇津まり子（うつ・まりこ）

山形大学准教授。主な論文として、“Lesbian and Heterosexual Duality in Kate Chopin’s ‘Lilacs,’” *Mississippi Quarterly* 63:2 (2010), “A Subversive Subplot in Kate Chopin’s ‘Ma’ame Pélagicie,’” *The Journal of the American Literature Society of Japan* 12 (2014)。

大田信良（おおた・のぶよし）

東京学芸大学教授。主な著書として、『帝国の文化とリベラル・イングランド—戦間期イギリスのモダニティ』（慶應義塾大学出版会、2010年）、『ポスト・ヘリテージ映画—サッチャリズムの英国と帝国アメリカ』（上智大学出版、2010年、共編著）、『冷戦とアメリカ—覇権国家の文化装置』（臨川書店、2014年、共著）、ほか。

越智博美（おち・ひろみ）

一橋大学教授。主な著書として、『モダニズムの南部的瞬間—アメリカ南部詩人と冷戦』（研究社、2012年）、『文学研究のマニフェスト—ポスト理論・歴史主義の英米文学批評入門』（研究社、2012年、共著）、『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」—格差、文化、イスラーム』（彩流社、2015年、共編著）、ほか。

伊達雅彦（だて・まさひこ）

尚美学園大学教授。主な著書として、『ゴーレムの表象—ユダヤ文学・アニメ・映像』（南雲堂、2013年、共編著）、『ユダヤ系文学に見る教育の光と影』（大阪教育図書、2014年、共編著）、『ユダヤ系文学と「結婚」』（彩流社、2015年、共編著）、『映画で読み解く現代アメリカ—オバマの時代』（明石書店、2015年、共著）、『アメリカン・ロードの物語学』（金星堂、2015年、共著）、ほか。

塚田幸光（つかだ・ゆきひろ）

関西学院大学教授、韓国済州大学校特別研究員、米国ハーバード大学ライシャワー日本研究所客員研究員。主な著書として、『シネマとジェンダー—アメリカ映画の性と戦争』（臨川書店、2010年）、『映画の身体論』（ミネルヴァ書房、2011年、編著）、『映画とテクノロジー』（ミネルヴァ書房、2015年、編著）、ほか。

アメリカ映画のイデオロギー——視覚と娯楽の政治学

2016年10月20日 初版第1刷印刷

2016年10月30日 初版第1刷発行

編著者 細谷等／中尾信一／村上東

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀・目次・扉デザイン／奥定泰之

組版／フレックスアート

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1561-9 ©2016 printed in Japan